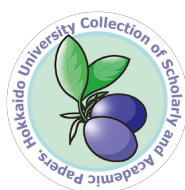




Title	井上毅の身体教育思想の形成過程：人種改良論および人類学的な知との関係から
Author(s)	新藤, 康太
Citation	北海道大学大学院教育学研究院紀要, 145, 63-78
Issue Date	2024-12-25
DOI	https://doi.org/10.14943/b.edu.145.63
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/93855
Type	departmental bulletin paper
File Information	07-1882-1669-145.pdf



井上毅の身体教育思想の形成過程

一人種改良論および人類学的な知との関係から―

新 藤 康 太*

【目次】はじめに

1. 東京人類学会への入会まで
2. 「古今人の長」と人種改良論の関係
3. 文相就任前の人類学的な知に関する学習と思索の痕跡
4. 日本人種の「発育」に対する配慮から体育・衛生を重視する教育政策へ
おわりに

【キーワード】体育, 人類学, 人種論, 人種改良論, 発育

はじめに

優生学史研究において、1884年（明治17）刊行の『日本人種改良論』を契機とする、明治期の人種改良論の盛り上がりは、20世紀初頭から始まる優生学の日本への本格的導入の「前史」に位置づけられている¹。その議論の中心は、心身の改良を目的とした欧米人との「雑婚」の是非にあったとされ²、「同時代における反響はもっぱら雑婚論に限られた」という見方が有力である³。

これに対して筆者は、明治中期の人種改良論の一部が身体教育論としての側面をもち、日本人の「虚弱」な身体を憂慮する教育関係者たちの議論と軌を一にしていた事実を既に明らかにしている⁴。近代日本における優生学と教育の関係についての歴史的考察は、教育学研究が長年取り組んできたテーマのひとつであるが⁵、当初から優生学が「社会的に広く流行した」1910年代以降を対象としてきたために⁶、明治期の人種改良論と教育の関係については未だ不明な点が多く、史料の収集や発掘も大きく立ち遅れている。よって、雑婚をめぐる論争の影に隠れた、人種改良論と身体教育の関係の関係を問うことは、優生学史と教育史の双方の進展に貢献しうる研究課題だといえる。

こうした関心に基づく本稿は、後述するように「人種」を意識しながら身体教育を捉え、また文部大臣として体育政策を推進した、井上毅（1844－1895）の身体教育思想の形成過程に着目し、明治期における人種改良論と身体教育を重視した政策やその背景との関連性を炙り出そうとするものである。

1893年（明治26）3月に文部大臣となった井上毅が、約1年5ヶ月の在任期間中に推進した文教政策は多岐に亘るが、周知のとおり、大臣としての最後の仕事は1894年（明治27）文部省訓令第六号「小学校ニ於ケル体育及衛生」の発令である。井上を「体育と学校衛生管理とを、その本来の意味において重視した最初の文相」と評した海後宗臣らの研究グループは、訓令第六号の背景にあった、井上の体育・衛生を重視する教育観がよく表れた史料として、1894

* 北海道大学大学院教育学院博士後期課程 学校教育論講座
DOI: 10.14943/b.edu.145.63

年（明治27）4月23日に第一地方部尋常中学校長たちの前で行なった演説の草稿（梧陰文庫文書B-1808）や「小学校生徒健康ニ関スル諮問事項案」（梧陰文庫文書B-3037、以下「諮問」と記す）を取り上げているが⁷、これらを読んでもみると、奇しくも「人種」や「人類学」といった言葉が用いられているという共通点に気がつく。

その事実、当時の井上毅に人種論を含む広義の人類学の素養があったことを示唆し、ひいては井上の身体教育思想が「人類学的な知」と何らかの関係を有していたであろうことが窺える⁸。しかし、井上の教育思想を扱った先行研究で⁹、この点に注目したものはほとんど見当たらない¹⁰。唯一、杉浦守邦が「諮問」の内容に「日本人が早熟かどうかという人類学的観点」が絡んでいることを指摘しているものの、杉浦はその理由について「お雇い外人教師エルウィン・ベルツの示唆による公算が大きい」と述べ、史料に含まれる人類学的な要素を井上とベルツとの関係に落とし込んで理解している¹¹。

今日「近代日本医学の父」と称され、「日本に関する人類学的研究の先駆者」でもあったベルツと井上毅の関わりはよく知られており、上記の1894年の演説においても、井上はベルツの言葉を引用したり、ベルツが行なった日本人とドイツ人の体重の比較調査の結果に言及したりしている¹²。ゆえに、人類学的な要素が史料に含まれていることに関してベルツからの影響を大きく見積もるのは、確度の高い推論であるように思われる。

ところが『ベルツの日記』によると、2人の交流の始まりは1893年（明治26）の11月27日で¹³、「諮問」はそれより半年ほど前に既に発されているのである。したがって、井上にはベルツと懇意になる前から広義の人類学に関するある程度の素養があったと考えられるが、そうであるならば、「人種」や「人類学」との繋がりをもつ井上の身体教育思想が形成される過程は、文相就任前から摂取していた人類学的な知やそれに基づく井上自身の問題関心と密接に関わっており、なおかつ同時代に語られていた身体教育論としての「人種改良論」との間にも、何らかの関連性があったのではないだろうか。

以上をふまえ本稿では、明治10年代半ばから20年代を対象として、広義の人類学に関する井上毅の素養や問題関心が読み取れる史料を俎上に載せ、人種改良論との位置関係に注意を払いながら、井上の身体教育思想が形成される過程で人類学的な知がどのような役割を果たしていたのか、順を追って確かめていく。一連の作業を通して、文部大臣となった井上が推進した体育政策や政策の背景にあった思想と人種改良論の間の関係を明らかにしたい。

なお考察を進めるうえで用いる史料については、井上毅自身が述べたものだけでなく、その言説の同時代的な位置を把握する手がかりになるような、井上の周辺にあった関連すると思しき諸言説や、先行研究が「井上の人種観に影響を与えたと予想されるもの」として挙げている文部省編『百科全書』の『人種篇』などの蔵書の内容にも目を配り¹⁴、適宜扱っていくこととする¹⁵。

1. 東京人類学会への入会まで

井上毅は、1886年（明治19）の10月中旬から11月上旬の間に、坪井正五郎らが率いる東京人類学会に入会している¹⁶。管見の限り、井上が人類学会の会員であったという事実自体、これまで日本の人類学史研究はもとより、井上毅研究においてさえ取り上げられてこなかったが、文相就任前の井上がどういった人類学的な知に触れていたかに関心がある本稿にとって、

それは無視できない重要な出来事である。

井上がいつ頃、広義の人類学に対する興味をもったかは定かでないが、1882年（明治15）に井上が添削した「学習院教則編成理由書」（梧陰文庫文書B-3200）は、「人種」を繰り返し用いながら教則の改訂理由に関して次のように述べている。

此正則教育タル日本普通人種ノ實際堪得サル困難ノ業ニシテ、略言スレハ日本人種ニ不適当ノ教育法ト云ハサルヲ得ス、今之ヲ詳明ニセントナラハ、

第一、日本と西洋トハ人種ヲ異ニシ、〔中略〕

我東洋人種ノ健康ハ、彼西洋人種ノ健康ニ劣ルコト生理上ノ実験ニ明ナリ、人種ノ健康既ニ彼ニ劣ルトキハ、従テ業務ノ艱難ニ堪フルノ気力モ亦遠ク彼ニ譲ラサルコトヲ得ス、〔中略〕

然ラハ則今ノ謀ヲナス只正則学科細目中ニ就キ、我日本ノ少年ニ於テ必要ナラサル者ヲ除キ、先務ヲ急ニシテ周博ヲ務メス学科ヲ簡易ニシテ、以テ学業ノ労ヲ減シ、学生ノ健康ヲ傷害セサラシムルノ一方アルノミ¹⁷

この時代の「人種」については、それがどのような意味で用いられているのか、その都度注意を払う必要がある。たとえば「中等人種」という熟語に含まれる「人種」は、階級としての人間集団、すなわち「同じ種類の人」を意味するが、本稿が着目するのは、人種の分類や人種論に繋がっている訳語としての「人種」である¹⁸。

また、当時の日本で受容されていた西洋由来の人種論は、人種間に生来的な心身の差異と優劣があることを説明する理論であり、今日から見れば人種主義を正当化し助長する誤った科学的言説であるが、本稿は、人種論やそれに付随する人類学的な知が教育と結びつくことによって、いかなる思考や言説を編み出すことが可能となり、時に政策や制度にまで及ぶ影響力をもちえたのかという観点から、その機能を明らかにする目的で「人種」に着目する。

上記の「学習院教則編成理由書」から引用した部分では、「健康」には人種間で優劣があることを認め、「健康」の差異に適切に配慮した教則の見直しを求めている。これは人類学的な知に根ざした身体教育言説の一種だといえるが、あくまでも意見書の地の文であるため、井上の考えそのものと捉えるかどうかの判断は留保すべきである。とはいえ、添削を担当した井上も、この意見を是認していたと見てよいだろう。明治10年代の中頃、井上毅の脳裏には、「人種としての身体」への意識とそれに配慮した教育という発想が既に存在していたのである。

2. 「古今人の長」と人種改良論の関係

さて、東京人類学会の会員となった井上は、早速同会の機関紙『東京人類学会報告』へ「「古今人の長」と題する論説を寄稿し、第10号に掲載されている¹⁹。その内容を見てみよう。

人の長、上古はいたく大にてありしが世を経るに随ひてやうやくに小さくなりゆきしとは、世の人の普ねく称ふる所なり。〔中略〕

古にもたけたかくたくましき人あり、又ひきく小さき人もありしなるへし。正倉院御藏の中にわけて大なる靴あるは又わけて小さきのもあり、其一を執て偏証とはなし難し。

戦乱の世には人の力をたふとむの時なれば、なへて長き人多かるべき理なるも、遊就館に蔵めたる新田中将の甲冑はなみの人の体に合ふほとなり。豊太閤の甲冑は更に小さきかと見ゆ。

英国スペンサー氏は、今人は古人より小さしといへる俗諺をは打ちかえし古人は今人よりも小さしといへり。何事も耳を信じて目を信ぜざる世の人の癖なればさもありぬべし。蒙古遺族の露西亞の都に住居するものは露西亞人種と均しく長大にして其人種の支那に在るものは支那人と異なることなきは、古今の別めにはあらで、正しく風土と習はしとによれるなるべし。

人の体は練習の力にて強大なるへき事心智發育と異なること無き理なれば、ゆくゆくは古の人に劣らぬのみかは更に其上にまさりて、雄雄しくたくましくなりゆかんことこそ願はしけれ。²⁰

この論説における井上の主張は、人間の身体が世代を経るにしたがって段々と小さくなっているという「世の人の普ねく称ふる所」を否定することである。その例証として、正倉院などに残っていた古い靴や甲冑が必ずしも大きいものばかりではないことを挙げた後、「古人は今人よりも小さし」と述べているという、ハーバート・スペンサーの説を引き合いに出している。また井上は、同じ人種の内に身体的な差異を生じさせる原因が「古今」の違いではなく、「風土と習はし」の違いにあると考えており、「人の体」が「練習の力」によって現時点よりも一層たくましくなっていくことを期待していた様子が読み取れる。

スペンサーの説の引用元は、*Study of Sociology*の翻訳書で梧陰文庫にも収められている『社会学』（梧陰文庫図書458）の次の箇所だろう。この部分は、人間の主観によって事実が歪曲され理解されていることへの注意を促す文脈で持ち出された例え話である。

喩ハ人種ノ体格ノ強大ハ漸時減少スル者ナリト説ハ古来一般ニ流行シタリト雖トモ、古人ノ骸骨乾体又ハ古人ノ使用シタル甲冑或ハ初代未開ノ人種ト直接シタル旅人ノ経験ヲ以テ証スレハ、人種ノ体格ノ強大ハ實際之ヲ平均スレハ漸時益々増加スルガ如シ²¹

一方、井上が批判しようとした「人の長」が次第に小さくなっているという「世の人の普ねく称ふる所」については、おそらく、当時盛り上がりを見せていた人種改良論に関する言説を念頭に置いていたと思われる。では、人種改良論と「古今人の長」における井上の問題関心は、具体的にどのような位置関係にあったのだろうか。

1884年（明治17）、『時事新報』の記者であった高橋義雄の『日本人種改良論』が刊行されると、日本人種の改良方法として、人種的に優れていると考えられていた西洋人との混血を進めるための「雑婚」を支持した部分が耳目を集め、その是非をめぐる論争が巻き起こった。同書の内容に関しては、「雑婚はあくまでも人種改良の一部」であるとし²²、「遺伝に対して環境や教育の改善を意味する」「習養」も重視していたことが先行研究によって指摘されているが²³、本稿冒頭でも述べたように、同時代の反響を含めた明治期の人種改良論全体としては、「一八八〇年代の『欧化政策』のもとで、おおいに議論され、その中心は欧米人との『雑婚』の是非にあった」と評価されている²⁴。

しかし実際のところ、高橋以外の人種改良論者たちもまた、もっぱら雑婚についてのみ語っ

ていたわけではなく、そこにはしばしば日本人種に関する雑多な言説が織り込まれていた。たとえば高橋の師である福沢諭吉は、1885年（明治18）6月に『時事新報』で連載した「日本婦人論」において、人種の改良のための「母体の強壯化」を説きながら²⁵、次のようなことも述べている。

西洋諸国ニテハ人ノ体格ヲ古今ニ比較シテ次第二長大強壯ヲ増シ、例ヘバ古人ニ適当シタル甲冑ナドモ今人ノ身ニ合ハズト云フ。其反対ニ、日本ノ人ハ次第二短小微弱ニ変シタル歟、古人ノ用キタル武器類ハ都テ重大ニ過ルヲ覚ルモノ、如シ。蓋シ徳川ノ治世二百五十余年ノ間ニ、社会中等以上ノ家族ガ次第二柔弱ニ流レテ身体ヲ破壊シタル原因ハ一ニシテ足ラズ、識者ノ議論モ甚ダ多シ。我輩固ヨリ異ナシ²⁶

福沢はここで、井上毅と同じく古今の人の体格の比較に関する議論を紹介しているが、日本人が西洋諸国の人とは反対に「次第二短小微弱ニ変シ」としているとする説に同意している。

これと似た見解を有し、現状に危機感を抱いていたのが、帝国大学理科大学教授の桜井錠二である。井上の「古今人の長」が東京人類学会の雑誌に掲載されてから約3ヶ月後の1887年（明治20）3月9日、桜井は東京高等女学校で演説を行い、「西洋人に近き人種」になるために「衣食住の改良を実施するは、他日一家の奥様とならるべき貴嬢方の責任であります、又人種改良の重き責任も他日母親とならるべき貴嬢方にあります」と、女学生たちに語りかけた²⁷。

桜井の人種改良論は、雑婚に全く言及せず、人種改良の方策として身体を重視し、衛生に配慮した「衣食住の改良」と「運動」の実践を女性に期待している点が特徴的である。そしてまた、西洋人と日本人との比較だけでなく、「我々は、此頃洋食でなければいかぬとか其他様々衛生法に注意をして居ながら、此等の事には一向頓着しなかつた所の天保以前の人間と比べて余程身体の弱きは全体何なる理由に依て然る者でありますか」と²⁸、古今の日本人種の身体を比較しており、自分たちの身体が天保年間以前の人間よりも弱くなっていると捉えている。

加えて、桜井自身は明言していないが、次のような文言や言い回しから、この論説にはスペンサーの影響が見て取れる。

我々は、人間であるとか或は万物の霊であるとか云ふ様な高尚なる考を出す前に、何でも一疋の動物であると云ふ考を持つことが緊要であります。我々は第一に満足なる動物であり、而る後満足なる人間であらねばなりません。又、健康を保持することは人間たるものの義務であり、之を害する者は一種の罪人たることを常に記憶せねばなりません。而して、吾身の不具を子孫に遺伝するに至ては、其罪実に重きことであります。²⁹

まず、健康の保持が「人間たるものの義務」であり、それを害する者は「一種の罪人」であるとする部分は、高橋義雄の『日本人種改良論』にも抄訳が載っている³⁰、スペンサーの *Education* 第4章『体育論』（以下、『体育論』と記す）の末尾の内容と一致する。次に、スペンサーの教育思想は「人間は動物である」という人間観に立脚しているとされるが³¹、『体育論』にも、「よき動物たること」(to be a good animal) が人生の成功の第一条件であり、国家的繁栄の条件でもあると書かれている³²。それと同様に、桜井は「満足なる動物」であることを第

一に考えるよう勧めているが、『日本人種改良論』にこういった表現は含まれていない。以上から、桜井はスペンサーの『体育論』を直接下敷きとして、雑婚ではなく、衛生に配慮した衣食住の改良と運動を手段とする身体教育によって人種の改良を目指すことを考えていたのだと推測できる。

それでは何故、ともにスペンサーに依拠する井上と桜井の間で、過去と現在の人間の身体の優劣に対する意見が全く異なっていたのだろうか。この疑問に関して、スペンサーは『体育論』のなかで次のように述べている。

ひとつの問題が残っている—これは、おそらく前述したどの問題よりも緊急に考察を要する。教育された階級の、成人して間もない者やじきに成人する若者たちは、年長者に比べて発育が思わしくなく強壮でもない、少なからぬ人々が主張している。〔中略〕我々は、古い甲冑を測れば現代人が昔の人よりも大きいと証明されること、また寿命は短くなるどころか延びているという事実を死亡表が示していることを思い起こし、根拠の無い信念のような主張に注意を払わなかった。しかし、詳細に観察することで、我々の見解は揺らいだのである。労働者階級をこの比較から除くと、ほとんどの場合、子どもたちは両親の身長に達しておらず、体格についても、年齢の差を考慮したうえでなお、劣っているといえる。〔中略〕我々は健康の法則に相当な注意を払っているにも関わらず、多くの点でそれを無視してきた祖父たちよりも虚弱に見える。そして、若い世代の外見や慢性的な病気から判断すると、彼らは我々よりもさらに頑健ではないようである。³³

スペンサーはかつて、人々の身体が世代を経るごとに虚弱になっているという主張に対し、昔の甲冑の大きさや寿命に関する統計を根拠に異を唱えていた。しかし、詳細な観察を経てその考えを改めたのだという。そして、労働者階級以外の人間が身体的に退化していることは事実であり、考察を要する緊急の問題であると論じている³⁴。つまり、井上が依拠したと思いき『社会学』の例え話ように人種全体の平均で考えた場合と労働者階級を除いた場合とで、スペンサー自身の結論が異なっていたのである。桜井や高橋が参考にした『体育論』は、人間の身体が次第に小さく虚弱になっていくことに対する問題意識を内包した、人種改良論と親和性が高い身体教育論であったといえる。

このように、「古今人の長」の記事を寄稿した時点で、日本人の「人種としての身体」の現在や将来に対する井上毅の認識は悲観的なものではなく、人種改良論者の桜井錠二が示したような、次第に虚弱になっていく傾向にあるという見解とは対照的な関係にあった。

3. 文相就任前の人類学的な知に関する学習と思索の痕跡

本節では、梧陰文庫に残る蔵書を手がかりとして、東京人類学会に「古今人の長」を寄稿してから文部大臣に就任するまでの間、明治20年代前半に相当する時期における、井上毅の人類学的な知に関わる学習と思索の痕跡を探ってみたい。着目するのは、文部省『百科全書』の『人種篇』上・下巻（梧陰文庫図書3-1・2）と、井上哲次郎著『内地雑居論』および『内地雑居続論』（梧陰文庫図書329、330）である。

文部省『百科全書』とは、1873年（明治6）から約10年の歳月をかけて刊行されていった、

英国ヴィクトリア朝の啓蒙書*Chambers's Information for the People*の分冊翻訳書の総称である。梧陰文庫には、『人種篇』の他にも『教導説』や『養生篇』、『交際篇』などの冊子が収められているが、井上はとりわけ『人種篇』を熱心に読んでいたようで、上下巻ともに多くの圈点が付されており、下巻の巻末に「二十年十一月読梧陰」という自筆の墨書が確認できる。その主な内容は、人種の分類とそれぞれの歴史や特徴のまとめ、人種間の能力および身体的な形質の差異に関する説明などで、ドイツのブルーメンバッハやイギリスのプリチャードといった、著名な学者たちの人種論が数多く取り上げられている。

『人種篇』については、竹沢泰子が「総論的な“Physical History of Man—Ethnology”のなかの一部の記述にすぎず、タイトル『人種篇』もその一部の見出しに依拠している」と述べている³⁵。しかしそのような評価は、比較すべき底本を間違えている点³⁶、また明治期にはethnologyが「人種学」と訳され理解されていた事実を考慮していない点から³⁷、適切とは言いがたい。実際、翻訳内容は概ね原書に忠実であり、原題のPhysical History of Man—Ethnologyについても、本文中で用いられている訳語を当てはめれば「人体史—人種学（もしくは人種論）」となる³⁸。この題そのものが、人種の来歴を記すことは、人間の身体の来し方と行く末について記すことと同義であるという思考に根ざした同書の性格を明示しているように思われ、井上の「古今人の長」との連続性が感じられる。1887年（明治20）11月に読了しているらしいことから、井上は東京人類学会に寄稿した後、「人種としての身体」への理解をさらに深めようとして、『人種篇』を熟読したのではないだろうか。

次に引用するのは、上巻で井上が圈点を付している箇所のひとつである。

人種ノ混和ハ大ニ世ノ文明ヲ進歩セシム可シト云ヘル説ハ亦至純至粹ナル血統ノ連続ヲ以テ善ト為ス説ノ太甚ナルニ異ナラズ、〔中略〕国民ニ長所不長所好悪ヲ生ズルコトハ血統ノ然ラシムル所ニシテ人力ノ能ク動カス所ニ非スト云ノ説ハ実ニ自暴自棄ニシテ事理ヲ解セザルモノト云フヘシ³⁹

『人種篇』が井上毅の人種観に影響を与えたと予想する齊藤智朗は、上記の部分が「人種改良という発想を根本から否定することにつながっている」と指摘している⁴⁰。しかし、ここでは「人種ノ混和」すなわち雑婚の効用は否定されているものの、「人力ノ能ク動カス所ニ非スト云ノ説ハ実ニ自暴自棄ニシテ事理ヲ解セザルモノ」であると述べていることから、「人力」によって人種の特性を変化させようとする試み自体には好意的で、たとえば前節で見たような「雑婚によらない人種改良」のアイディアとは、むしろ親和的な言説だといえる。

一方『人種篇』の下巻では、人類の「身体ノ強力（身体力）」の差異に関して、「世ノ学者常ニ野蛮土人ノ気力甚タ強キヲ視テ、開化ノ進ムニ随テ人類ノ強力次第ニ減損スルト云フ説ヲ信セリ。然レトモ其後更ニ熟考深察スルニ依テ、遂ニ前説ノ非ヲ知ルニ至レリ」と説明されており⁴¹、「遂ニ前説ノ非ヲ知ルニ至レリ」という部分に井上の手で圈点が付されている。また、航海冒険家が旅先で行った身体力検査の成績を比較したうえで、「故ニ文明諸国ノ中等ニアル勤勉勤勞スル人民ノ如キハ、常ニ懶惰ニシテ屢々諸物ノ欠乏ニ困ム所ノ野蛮人種ニ比スレバ、其健康ノ優レルコト論ヲ待タス。然ラハ則チ其強力モ亦野蛮種ノ上ニ出ルハ必然ナリ」と述べるなど⁴²、『人種篇』は文明化にともなって人類の身体力が次第に減損するという説を強く批判する立場をとっていたのである。そのことは、下巻の最後に記された「太古ノ遺物

及ヒ世上ノ歴史ニ拠リテ考フルニ、凡ソ人タルモノハ其総体ヨリ之ヲ見ルモ身体ノ仕組ニ於テ昔人ニ劣ルコトナク、又其一人ニ付テ之ヲ見ルモ、身体ノ大小体力ノ強弱ニ於テ昔人ト異ナルコトナシ」という一文からも明らかだろう⁴³。

このように、『人種篇』の内容は、人種改良の方策としての雑婚を暗に否定していたが、「古今人の長」の論説において日本人の「人種としての身体」の現在や将来を楽観していた井上毅の認識に変更を迫るものではなく、むしろその認識を補強する役割を担った可能性が高い。

続いて、『内地雑居論』および『内地雑居続論』に目を向けよう。梧陰文庫の蔵書には日付が記され、それぞれ1889年（明治22）と1891年（明治24）に読んでいた形跡がある。後にこれらを収録した資料集の編者たちからは、最晩年に至るまでナショナリストであった井上哲次郎が展開した、「条約改正を延期しても内地雑居は有害ある故断然拒絶すべしという議論」の「幼稚さと強引さ」が指摘されている一方で⁴⁴、「反対論の代表的なものにして当時空論的なものが多かりしに比して割合に纏まつた、当時のものとしては学術的な文献」とであると評されてもいるが⁴⁵、その内容は人種論の知見に立脚して書かれており、人類学的な知の媒体としての側面があるといえる。

井上毅への影響という観点から特筆すべきは、『内地雑居論』において「人種の滅亡」について論じている部分だろう。内地雑居問題のうち、人種間の競争によって生じる益不利益をどう判断するかは実に重要な論点であった。著者の述べるところによれば、優等人種と劣等人種の接触が起こると、劣等人種は次第にその勢力を失い、やがて滅亡する⁴⁶。また、人種が滅亡に至った例は歴史上にいくつも存在し、近年では「サンドウッチ島」（ハワイ）における人口減少に滅亡の徴候が見られるが、それは現在の日本にとっても無視できない問題であり、従って安易に雑居に賛成すべきではないと警鐘を鳴らしている⁴⁷。井上毅は、この「人種の滅亡」に向かっているとされたハワイの事例に対して思うところがあったらしく、『内地雑居論』からの抜粋、あるいはその引用元であるチャールズ・ダーウィンの*Descent of Man*を抄記した自筆の文書「ハワイ島人口減少ニ関スルダーウィン氏説抄訳」（年月日不詳、梧陰文庫文書B-2133）が残っている⁴⁸。

『内地雑居論』は、歴史上に認められる「人種の滅亡」への関心を誘発し、さらにそれがハワイのように徴候を示しながら徐々に進んでいくものであるというイメージを、井上に深く刻みつけたのではないだろうか。

4. 日本人種の「発育」に対する配慮から体育・衛生を重視する教育政策へ

「わが国学校衛生の創設者」として名高い三島通良は⁴⁹、文相時代の井上毅について、次のように回想している。

井上毅君カ文部大臣トナラレシ時、其当時ノ学校ノ衛生ノ有様ヲ陳述セシニ、初メハ大臣之ヲ信セス。因テ巡回シテ親シク其实況ヲ視察セラレンコトヲ請ヒシニ、大臣之ヲ諾サレ、諸君モ御記憶アランカ中国辺関東辺ヲ巡回セラレマシタ。帰京ノ後、非常ニ感激サレシモノ、如ク嘆シテ云ハル、ニ、「汝ノ言ノ如ク目下ノ有様ハ実ニヒドイ。学校生徒ハ皆哀レナ顔ヲシテ居ル、是全ク文弱ニ流レタル弊ニシテ、大ニ憂フヘキ事ナリ。凡ソ国ノ滅フルハ外倭寇ニ因テ然ルニ非ラスシテ内乱ニ因テ然ルモノ多シ。現今ノ如ク第

二ノ国民タル者皆顔色憔悴ト云フカ如キ有様ニテハ、即チ民ニ菜色アリト云フヘキ有様テアルナラハ、実ニ教育ヲ施スカ為メニ国家ヲ滅亡セシムルモノナリ。去レハ文部省ニ於テ全国ノ教育ノ枢機ヲ握リ上 陛下ノ御親任ヲ辱フスル我輩カ実以テ申訳ナキ次第也。今ニシテ之カ挽回ノ策ヲ講セスンハ亦如何トモナス能ハサルニ至ル可シ」ト。⁵⁰

三島の話によると、文部大臣就任当初の井上毅は、学校衛生の現状が「学校生徒ハ皆衰レナ顔ヲシテ居ル、是全ク文弱ニ流レタル弊ニシテ、大ニ憂フヘキ」事態にあることを予想していなかったようである。これは、本稿がここまで検討し確認してきた、日本人の「人種としての身体」の現在や将来に対する井上の認識が文相就任前の段階では悲観的なものでなかったという事実と合致する。またどうやら、三島が大臣となった井上に「巡回シテ親シク其实況ヲ視察」することを請願し、実施された「巡回」をきっかけとして、井上の認識と身体教育に関する考えが変化したようであるが、はたして実際にそうであったのか、井上本人の言動に即して考察を進めよう。

文相就任後、井上は大沢謙二ら帝国大学医科大学の教授陣へ、次のような記述を含む「諮問」(梧陰文庫文書B-3037)を発している(原本の抹消文字の一部を□の枠内に示す)⁵¹。

第二問

寒帯ノ人ハ發育ト盛遂トノ時期俱ニ熱帯ノ人ヨリ晩キハ事実ノ証明スル所ナリ。我国ハ温帯ニ位置スルト及潮流ノ関係ヨリシテ、我カ人民ヲシテ温和ノ氣候ニ棲息セシメタリ。

区域

此ノ氣候ノ結果ナルカ、又ハ人類学ノ説明スヘキ 人種論ニ属スヘキカ 又ハ衛生学ノ区域ニ属スヘキカハ姑ク置イテ論セズ。兎ニ角、我カ人民ハ欧人種ニ比ヘテ較ヤ發育及成遂ノ期ノ早キヲ覺フルカ如シ。果シテ然リトセハ、青年間ニ於テ経歴スヘキ精神煉磨ノ時期即チ学期(小学中学大学ヲ通シテ云)モ亦此ノ天然ノ経過ニ比例ヲ取ルヘクシテ、欧人ノ学制ニ形倣スヘカラザルカ如シ。如何、此事生理学及衛生学ノ関係ニ属スヘキカ、切ニ諸君ノ教示ヲ欲ス。

井上は日本人種の比較的早い「發育及成遂」に目をつけ、それに合わせて学制を変えるべきか否かを思案しながら⁵²、医科大学の教授たちに助言を求めている。現在、この「諮問」に対する4人分の「答申」が確認されているが⁵³、そのうち3人の医学者たちは、小児の發育に関する統計の不在を指摘し、そのために判断が難しいという趣旨の回答をしている。梧陰文庫に諸学校で行なわれた身体検査の成績表が10点以上残されているのは、あるいはこのやりとりを通じて、井上が子どもの發育に関する統計やその元となる身体測定の結果に関心をもったためかもしれない。井上はまた、地方の学校を巡回した際にも、生徒の健康状態や發育を記録した統計表を取り寄せて目を通してしている。

そして当時、医科大学の大学院生として、まさに「日本健体小児の發育」という研究テーマに取り組んでいたのが三島通良であった。「諮問」と「答申」のやりとりが行なわれた1893年(明治26)、三島は自らの研究に関して、「小児發育の問題は其独り医学上に於て緊肯なるのみならずして、教育上行政上等其関するところ実に広大なり。而して特に日本人種身体發育の標準なるもの実に源を此所に發す。是れ予か躬ら大学院に入学して此問題を専攻する所以な

り」と述べている⁵⁴。学校における身体測定とその結果の蓄積は、19世紀に人種の科学的分類を押し進めた人類学と同じ測定の技法を用いた実践であり、それが開始されたことによって、将来の日本人種たる子どもの発育が、教育上の重要な関心事であると同時に人類学や医学などにまたがる統計的研究の対象として浮上してきたのである。三島は、1890年（明治23）に主著『はゝのつとめ』の増補訂正第二版を出版した際にも、第一版での「小児成長の度」から「小児の発育」へと表現を改め、さらに小児の発育調査が行なわれず統計表がない現状を「謂はゞ日本人と云ふ人種の標準が無きわけです」とパラフレーズしている⁵⁵。井上毅が学校に通う児童生徒の発育に注目し実態を確かめようとした時期には、このように、子どもの発育状態が「人種の標準」に直結した研究対象として把握され、関心が集まり始めていた。人類学の素養があった井上の目には自ずと、児童生徒の発育の実状に、日本人の「人種としての身体」の将来像が重なって見えたのではないだろうか。

1894年（明治27）4月23日、第一地方部尋常中学校長たちを前にして行なった演説のなかで、井上は教育が「文弱」を招き「人ノ身体ヲ弱クシ、天然ノ発育ヲ害スル」ことを危惧しながら、「世ガ文明ニナルト同時ニ人種ガ青クナッテ亡国ノ兆ヲ顕シタ例ハ歴史上ニ見エル。是ハ十分今日ニ注意セネバナラス」と述べており⁵⁶、本稿第3節で見た『内地雑居論』に含まれる歴史上の「人種の滅亡」事例の話をもとにしている。また、この演説の原稿には複数の草稿が存在するが、推敲を重ねる途中で「天保暦ノ人ハ長モ大キイガ体量モ今ノ青年ヨリモ優ッテ居ル」と、人種改良論者の桜井錠二と類似した見解を記している点に⁵⁷、かつて東京人類学会の機関紙へ「古今人の長」を寄稿した時から、認識が大きく変化していた様子も窺える。

そして井上は、「中等教育制度ヲ改正」し「ナルベク授業時間ヲ減スル」ことを訴えたが⁵⁸、日本人種の「発育」に配慮して教育制度を見直そうとする発想自体は「諮問」と共通している一方、この演説では、生徒の身体に過度の負荷をかける学校教育の有様が、既に「天然ノ発育ヲ害スル」原因になっていると判断している。人類学的な知は、文相として巡回した先々での観察や、身体測定の統計から、将来の日本人種たる子どもの「天然ノ発育」が学校での教育によって阻害されている問題を意識し始めた井上毅に、そうした現状がいずれ「人種の滅亡」に至る「亡国ノ兆」ではないかと疑う強い危機感をもたらし、翻って、身体教育に熱意を注ぎながら学校教育の改革を構想する要因にもなっていたと考えられる⁵⁹。

以上のような背景をもつ1894年（明治27）の文部省訓令第六号「小学校ニ於ケル体育及衛生」は、「小学校教育ノ時ハ方ニ身体発育ノ期」であると捉え、学校に衛生への配慮を促し、「及フタケ活発ナル運動ヲ課ス」ことを求めている⁶⁰。衛生と運動の2つを柱とする身体教育によって、日本人種本来の発育を最大限に引き出そうとするこの政策は、雑婚とは別の方法として身体教育を重視する人種改良論の性格を帯びていたといえるだろう。人類学的な知に根ざした井上毅の身体教育思想は、文相就任後、急速に人種改良論に近づいていったのである。

おわりに

本稿では、明治10年代半ばから20年代を対象として、広義の人類学に関する井上毅の素養や問題関心が読み取れる史料を用いて、同時代に語られていた人種改良論との位置関係に注意を払いながら、井上の身体教育思想が形成される過程で人類学的な知がどのような役割を果たしていたかを確かめ、文部大臣となった井上が推進した体育政策やその背景にあった思

想と人種改良論の間の関係を明らかにすることを試みた。

文部大臣に就任する前から広義の人類学に関する素養があった井上は、明治10年代の中頃には既に、人種間の差異に配慮した教育の必要性を認め、「人種としての身体」を意識し始めていたと考えられる。1886年（明治19）、東京人類学会へ寄稿した「古今人の長」では、人間の身体が世代を経るにしたがって段々と小さくなっているという説を否定し、同じ人種の内に身体的な差異を生じさせる原因が「風土と習はし」の違いにあるとの考えから、「練習の力」によって日本人の身体が今後も一層たくましくなっていくことを期待していた。この時点で、日本人の「人種としての身体」の現在や将来に対する井上の認識は悲観的なものではなく、同時期にスペンサーの『体育論』を下敷きとする人種改良論を唱えていた桜井錠二が示したような、次第に虚弱になっていく傾向にあるという見解とは対照的であった。こうした井上の考えは、文部省『百科全書』の『人種篇』を読み込むことにより補強されていた可能性が高い。その一方で、『内地雑居論』を通して異人種同士の接触をきっかけに劣等人種が滅亡するという理論を学び、「人種の滅亡」問題に関心をもっていた形跡もある。

1893年（明治26）に文相となった井上は、日本人種の発育に関心を向け、児童生徒の発育の実態を知ろうと行動を起こした。ここに至って、人類学的な知は、子どもの身体が天然の発育から遠ざかっている現状を、日本人種が滅亡に向かいつつある徴候と捉えることを可能にし、強い危機感を伴う身体教育思想の形成を促す役割を果たしたのである。一見奇妙にも思われる、「人種」や「人類学」との繋がりこそ、井上の身体教育思想の成立に不可欠な要素であったといえる。そしてまた、井上が文相として最後に取り組んだ文部省訓令第六号「小学校ニ於ケル体育及衛生」は、衛生と運動とを手段とする身体教育によって日本人種本来の発育を最大限に引き出すことを目指す、人種改良論に近似した教育政策であったことが明らかになった。

近代日本にphysical educationとしての身体教育が流入し、定着していった時代は、身体に関する人類学的な知が普及し始め、言説が溢れていた時代でもあった。そうした状況の下では、教育対象である子どもの身体についての科学的な思考が、「人種としての身体」を扱う人類学的な知の影響を受けながら、人種改良論に接近していく可能性を有していたという事実を等閑視するべきではないだろう。井上毅の身体教育思想の形成過程は、日本における優生学と教育の関係の歴史を捉えなおすための橋頭堡となりうる、好個の事例なのである。

注

- ¹ 横山尊『日本が優生社会になるまで—科学啓蒙、メディア、生殖の政治』勁草書房、2015年、10頁。
- ² 藤野豊『日本ファシズムと優生思想』かもがわ出版、1998年、387頁。
- ³ 横山尊「人種改良」山口輝臣・福家崇洋編『思想史講義【明治篇Ⅰ】』筑摩書房、2022年、239頁。
- ⁴ 新藤康太「婦人の改良と衛生—渡邊鼎の束髪奨励論に着目して」『日本の教育史学』第63集、2020年、26～28頁。
- ⁵ 近代日本における優生学と教育の関係についての歴史的考察は、科学史分野の研究を追いかけるようにして、1990年前後から着手されている。その後2000年代に入ると、生命科学

技術の目覚しい進歩が脚光を浴びたことなどを背景に、いわゆる「新優生学」が教育（学）に及ぼすことが予想される影響へと関心が向けられ、あらためて優生学と教育（学）の関係の歴史を考察する意義が見直された。こうした流れに掉さす『教育学における優生思想の展開』は、教育学の立場から行われた優生学や優生思想に関する歴史研究のひとつの到達点といえる（藤川信夫編著『教育学における優生思想の展開—歴史と展望』勉誠出版、2008年）。

- ⁶ 高木雅史「『大正デモクラシー』と優生学—『自由教育』論者の能力感の一側面」森田尚人ほか編『教育学年報1 教育研究の現在』世織書房、1992年、304頁。
- ⁷ 海後宗臣編『井上毅の教育政策』東京大学出版会、1968年、181～190頁。
- ⁸ 本稿における広義の人類学とは、形成期の日本の人類学がそうであったように、「今日の区分では人種学、優生学、考古学、統計学などに分類されるような雑多な領域」を有していた19世紀の人間科学としての人類学を指す（富山一郎「国民の誕生と『日本人種』」『思想』No.845、岩波書店、1994年11月、51頁）。したがって「人類学的な知」という場合には、人種概念を用いながら物事を説明する人種学の言説（人種論）もそこに含まれるものとする。実際、井上毅も「諮問」において人種論を人類学の一区分と捉えている。
- ⁹ 井上毅の教育思想を主題とする先行研究として、たとえば次のものが挙げられる。野口伐名『井上毅の教育思想』風間書房、1994年。同『文部大臣井上毅における明治国民教育観』風間書房、2001年。柳田文男『井上毅と教育思想』晃洋書房、2020年。
- ¹⁰ 井上毅の身体教育思想については、訓令第六号「小学校ニ於ケル体育及衛生」の先駆性を高く評価する体育史や学校保健史の分野でも取り上げられている（木村吉次『日本近代体育思想の形成』杏林書院、1975年、127～144頁。入江克己『日本近代体育の思想構造』明石書店、1988年、96～109頁など）。総じて、井上が身体の教育を重視した理由としては、井上自身が病弱であったことや、国民の健康維持と体力の増強を国家富強の基礎と認識していたこと、日清戦争を引き起こした当時の国際情勢に対する危機意識との関係が指摘されてきた。
- ¹¹ 杉浦守邦「三島通良（12）」『学校保健研究』通巻第122号、1970年3月、132～134頁。
- ¹² 齊藤智朗「文相井上毅とお雇い外国人ベルツ」國學院大學日本文化研究所編『井上毅と梧陰文庫』汲古書院、2006年、158～164頁。
- ¹³ トク・ベルツ編、菅沼竜太郎訳『ベルツの日記（上）』岩波書店、1979年、164頁。
- ¹⁴ 齊藤智朗『井上毅と宗教—明治国家形成と世俗主義』弘文堂、2006年、265頁。なお、ここでいう「蔵書」とは、國學院大學図書館に「梧陰文庫」として、井上が残した膨大な数の文書とともに所蔵されている図書を指す。
- ¹⁵ 史料の引用にあたり、漢字を新字体に改めたうえで、合字を開き、句読点のない史料については適宜これらを施した。また、明らかに誤字脱字と判断したものについては修正した。
- ¹⁶ 井上毅が入会した頃の東京人類学会は、1884年（明治17）の人類学会発足から2年が経過し、会員数は160名を超えていた。初めこそ学生たちの小規模な集まりであったが、当時の会員には渡邊洪基（帝国大学総長）、菊池大麓（理科大学長）、外山正一（文科大学長）、大沢謙二（医科大学教頭）、穂積陳重（法科大学教授）といった大学関係者や、箕作麟祥（元老院議員）などがおり、井上の後には西周（元老院議員）、加藤弘之（元老院議員）、大島圭介（学習院長）も入会している。

- ¹⁷ 『井上毅傳 史料篇』5, 1975年, 638～640頁。
- ¹⁸ 人種とその分類の説明を含む福沢諭吉の『世界國盡』や内田正雄の『輿地誌略』が地理教科書として使用されたこと、それ以上に啓蒙書として広く普及し読まれたことなどから（海後宗臣編『日本教科書大系 近代編 第十五卷 地理(一)』講談社, 1965年, 622～624頁）、明治初期には人類の区分を表すraceの訳語としての「人種」が一般に浸透し、用いられていたと考えられる。ただし、この「人種」という概念は、必ずしも遺伝学的な形質分類に従ったものではなく、地域ないし文明との相関性が強いものであった（山室信一『思想課題としてのアジア』岩波書店, 2001年, 54頁）。
- ¹⁹ 『東京人類学会報告』には、第10号のこの論説のほか、第12号の「雜記」欄に、津軽地方の習俗である「ネブタ踊」を紹介した井上の短い報告が掲載されている。なお、梧陰文庫には同誌の第8号の冊子と第21号附録の会員姓名録（梧陰文庫文書E-110, E-111）のみが所蔵されており、井上が寄稿したものについては、現時点で『井上毅傳』などの史料集にも収録されていない。
- ²⁰ 井上毅「古今人の長」『東京人類学会報告』第10号, 1886年, 45～46頁。
- ²¹ 斯迦鎖原著, 大石正巳訳『社会学』第2巻, 1883年, 215～216頁。5巻5冊が梧陰文庫に収められており、5冊目に「明治十九年夏在塩原温泉閑之」との朱書きがある。
- ²² 鈴木善次『日本の優生学— その思想と運動の軌跡』三共出版, 1983年, 43頁。
- ²³ 横山尊, 前掲「人種改良」, 238頁。
- ²⁴ 藤野豊, 前掲書, 387頁。
- ²⁵ 鹿野政直『健康観にみる近代』朝日新聞社, 2001年, 31～33頁。
- ²⁶ 福沢諭吉「日本婦人論 六」『時事新報』第991号, 1883年6月10日。
- ²⁷ 桜井錠二「女子の体育」『東洋学芸雑誌』, 1887年4月25日, 312～313頁。「女子の体育」と題され、『東洋学芸雑誌』, 『女学雑誌』, 『日本大家論集』, 『高名大家女子教育纂論』など、多くの雑誌や書籍に筆記記録が掲載されたこの論説は、「日本で最初の女子体育論のひとつ」と目されている（香川せつ子「イギリス女子身体教育の日本への伝播—下田歌子と安井てつの視察・留学を中心に」『日英教育研究フォーラム』25号, 2021年, 55頁）。
- ²⁸ 前掲「女子の体育」, 318頁。
- ²⁹ 同上, 318～319頁。
- ³⁰ 高橋義雄『日本人種改良論』, 1884年, 63～64頁。
- ³¹ 赤塚徳郎『スペンサー教育学の研究』東洋館出版社, 1993年, 90-91頁。
- ³² Herbert Spencer, *Education: Intellectual, Moral, and Physical*. London, G.Manwaring, 1861, p.146.
- ³³ Ibid., pp.172-173. 引用箇所訳出にあたって、島田四郎訳『教育論』（玉川大学出版部, 1981年）および三笠乙彦訳『知育・徳育・体育論』（明治図書出版, 1969年）を参照した。
- ³⁴ 桜井が「大学の学生」と「百姓」を比較し、衣食住が上等で衛生に注意している前者より後者の方が「壮健」と述べているのも、こうしたスペンサーの『体育論』の内容を踏襲しているためだと考えられる（前掲「女子の体育」, 318頁）。
- ³⁵ 竹沢泰子「明治期の地理教科書にみる人種・種・民族」京都大学人文科学研究所『人文学報』第114号, 2019年12月, 218頁。
- ³⁶ 竹沢は、『人種篇』の底本が1867年のアメリカ版であると主張する先行研究を支持している

にも関わらず、手違いからか、英国第三版あるいはそれと同一内容のアメリカ版から原文を引用し、翻訳書との比較作業を行なってしまうている。本来比較すべき1867年のアメリカ版の内容は、英国第四版（NEW EDITION）に相当し、第三版からは大きく改変されたものである。なお、『人種篇』を含む文部省『百科全書』の底本については、長沼美香子の研究を参照のこと（長沼美香子『訳された近代—文部省『百科全書』の翻訳学』法政大学出版局、2017年、63～74頁）。

³⁷ たとえば、井上哲次郎『哲学字彙』、1881年、31頁。また、『人種篇』においても「イソノロディー」は「人種ノ区別ト云フ意義」とであると説明されている（秋山恒太郎訳『百科全書 人種篇』上巻、文部省、1874年、1～2丁）。

³⁸ 『人種篇』の本文中で、ethnologyは「人種論」とも訳されている。

³⁹ 前掲『百科全書 人種篇』上巻、54丁。

⁴⁰ 齊藤智朗、前掲『井上毅と宗教』、266～267頁。

⁴¹ 前掲『百科全書 人種篇』下巻、28丁。

⁴² 同上、30丁。

⁴³ 同上、56～57丁。

⁴⁴ 稲生典太郎編『内地雑居論資料集成1』原書房、1992年、11～12頁。

⁴⁵ 明治文化研究会編『明治文化全集 第11巻 外交篇』第三版、日本評論社、1968年、37頁。

⁴⁶ このような言説は、明治期に生物進化論よりも積極的に受容された社会ダーウィニズムとして一括りにされ、抽象的に捉えられがちである。しかし、社会ダーウィニズムを類型化した鶴浦裕によれば、内地雑居論争に最も顕著に現れた集団主義的社会ダーウィニズムは人種主義と不可分に融合している点が特徴であり、その受容は、白人を強者として、日本人を含めた有色人種を弱者として位置づけるとともに、弱者側の人種の絶滅を人類進化の踏み台とみなす論理を受け止めることを意味していた（鶴浦裕「近代日本における社会ダーウィニズムの受容と展開」柴谷篤弘ほか編『講座進化②—進化思想と社会』東京大学出版会、1991年132～140頁）。

⁴⁷ 井上哲次郎『内地雑居論』、1889年、30～43頁。

⁴⁸ 『内地雑居論』が引用し、井上が書き残したハワイにおける劣等人種の人口減少の事例は、1874年刊行の*Descent of Man*第2版で加筆された部分に含まれている。

⁴⁹ 岸野雄三監修『近代体育文献集成 第Ⅱ期 別冊 解説篇』日本図書センター、1983年、71頁。

⁵⁰ 三島通良述、神保鍊太郎記『衛生学講話筆記録』、1898年、5頁。なお、引用文中の鉤括弧（「」）は、便宜を図る目的で筆者が付したものである。

⁵¹ 梧陰文庫文書B-3037は、実際に発された諮問そのものではなく、草稿と思しき文書であり、推敲の跡が残っている。取り消し線などで抹消された部分も含めて読んでみると、井上はこの時、気候の差か、生来的な人種の特徴か、衛生に関する事柄のいずれかの原因によって、「我カ人民」が「欧人種」に比べてやや早熟な人種になっていると認識していたことが分かる。日本に「人種衛生（Rassenhygiene）」が紹介されるのに先立って、井上毅のような官僚の心中にまで、人類学や衛生学にまたがるものとして捉えられた「人種の發育」への関心が芽生えていた事実は興味深い。

⁵² ここで井上が検討していたのは、早熟という日本人種の發育の特徴に合わせて「学期」を変えるかどうかであって、「諮問」からは、日本人種の發育の状態や、人種の發育を左右す

る要因としての学校教育制度に対する明確な問題意識は読み取れない。

⁵³ 梧陰文庫文書B-3173, B-3175, B-3177, B-3189。

⁵⁴ 三島通良「学校衛生の現況」『教育報知』第382号, 11頁。

⁵⁵ 三島通良『はゝのつとめ 子の巻』増補訂正第二版, 1890年, 28～29頁。

⁵⁶ 梧陰文庫文書Ⅱ-413 ⑩（「中学校制度ノ改正及体育ノ欠点」として『井上毅傳 史料篇』5に収録）。

⁵⁷ 梧陰文庫文書B-2656。

⁵⁸ 前掲, 梧陰文庫文書Ⅱ-413 ⑩。

⁵⁹ 井上文相が「国体教育主義」と教育富国観, さらにには教育の実用主義を根底にして文教政策を展開していったと捉える野口伐名は, その推進力としての思想的役割を演じたものが, 対外的危機意識と憂国意識であったと指摘しているが(野口伐名, 前掲書, 365頁), これらはまた, 井上が直面した子どもの発育の不振という教育上の問題と, 人類学的な知に基づく「人種の滅亡」過程のイメージを結びつけて理解することを促したと考えられる。

⁶⁰ 海後宗臣編, 前掲『井上毅の教育政策』, 183頁。

The Formation Process of Inoue Kowashi's Idea for Physical Education: Focusing on Race Betterment and Anthropological Discourses

Kota SHINDO

Key Words

physical education, anthropology, ethnology, race betterment, growth

Abstract

This paper aimed to examine how anthropological discourses related to race betterment were involved in the formation process of Inoue Kowashi's idea for physical education.

Inoue Kowashi (1844-1895) had a knowledge of anthropology even before he became Minister of Education. By the middle of the Meiji 10s, he had been aware of the “body as Japanese race” and already recognized the need for education that took account of racial differences.

In an essay contributed to the Tokyo Anthropological Society, he rejected the theory that the human body is gradually getting smaller with each passing generation — the human race is degenerating, and hoped that the Japanese body would continue to grow stronger through the power of practice, based on the idea that differences of climate and custom cause physical differences within the same race. Inoue's perception of the “body as Japanese race” was quite optimistic, in contrast to the opinion of Sakurai Joji who was a chemist and advocated the theory of racial improvement based on Spencer's *Physical Education*.

However, after his appointment as Minister of Education, Inoue turned his attention to the natural growth of the Japanese race and took action to know the actual growth of the Japanese pupils. Anthropological discourses enabled to see the current situation of children's bodies moving away from natural growth as a sign that the Japanese race was heading towards extinction, and encouraged the formation of Inoue's idea for physical education that was accompanied by a strong sense of crisis.

As a result, in order to maximize the natural growth of the Japanese race, he promoted physical education that consist of hygiene and exercise. In other words, Inoue's idea for physical education rapidly approached the race betterment theory which was the rudimental argument of eugenics in Japan.